

ESPLANADE

FUKUOKA ART MUSEUM



201

主役は布!?

見てから 読むか

所蔵品紹介

薬師如来は、左手に持った薬壺であらゆる病を癒すとされる仏です。本像は、薬王密寺東光院（博多区吉塚）よりご寄贈いただいたのですが、元々は住吉神社（博多区住吉）の神宮寺である円福寺に安置されていました。

制作されたのは、平安時代後期の11～12世紀頃と考えられます。頬が張った丸顔で眼は半分ほど開き口を薄く結んでいます。当時の平安貴族たちが好んだ穏やかな表情といっぴよいでしょう。

ですが、顔から下の印象はやや異なります。肩幅はそれほど広くありませんが、脇をしめて肘はきつい角度に曲げ、脚もがっちり組んでいるので身体に力を入れているようにも見えます。総じて、穏やかさを基調にしながらも力強さを秘めた像であるといえます。

ところで、本像は複数の部材を組み合わせる寄木造りという技法で作られています。この技法は、一本の木から像を彫り出す一木造と比べるとどうしても構造の強度で劣ります。そのため、像を構成する部材が全て制作当初のまま保たれることはほとんどなく、本像の場合も背面の部材は全て後世の修理で補われたものです。

読むか

正面からの写真では分かりませんが、展示室で像を側面からご覧いただくと、背中だけ木材の色味が異なっているのを確認することができます。この背中の部材には修理の経緯が墨書されており、それによると、修理を企画したのは福岡藩祖・黒田如水の妹、妙円^{みょうえん}であったそうです。妙円は仏教への信仰が篤く、住吉の地に庵を構えて仏道修行に励んでいたといい、本像を目にしたのはその折であったと想像されます。妙円が参拝した時、本像は背面を中心にかなりの損傷を負っていたことでしょう。

その姿に胸を痛め、修理を思い立ったのではないのでしょうか。本像はこの他にも様々な修理をほどこされており、妙円をはじめとする多くの人々の想いを受け継ぎながら今日まで伝えられてきました。こうした営為を支えたのが、病の治癒に対する祈りであったことは申し上げるまでもないでしょう。

本像は、コレクション展「東光院のみほとけ」（～2021年3月 東光院仏教美術室）にてご覧いただくことができます。

学芸員（古美術担当）
宮田大樹

修理を通して受け継がれる想い



読んでから 見るか

やくしによらいざぞう 《薬師如来坐像》

作者不詳

Artist Unknown

DATA

制作年	平安時代 11 - 12世紀
技法・素材	木造・寄木造
サイズ	86.0cm
コレクション	東光院仏教美術資料



5. 藤田嗣治《五人の裸婦》1923年 東京国立近代美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296

6. 藤田嗣治《片身替神懸》メゾン=アトリエ・フジタ、エソンヌ蔵

藤田嗣治 (レオナルド・フジタ)

1886年東京都生まれ。東京美術学校西洋学科で学んだ後、フランスで活躍。日中戦争中は従軍画家として《アッツ島玉砕》などの戦争画を制作。戦後、フランス国籍を取得し、レジオン・ドヌール勲章シュバリエを受章。カトリックの洗礼を受け、レオナルドという洗礼名を与えられる。1968年逝去。

藤田と筒描をテーマに論文を書いたのが、2013年。その時は、展覧会が開催できると考えてもいなかったと思います。いつしか、展覧会をしたい、と思い立ち、するのなら、戦争画も絶対に展示したい、と念じてきました。福岡市美術館にそのミッションがある、と思ったのは、裸婦の名作があることもさることながら、戦時中に福岡でも戦争画が展示されていたことがひとつ。さらに今号で紹介している菊畑茂久馬さんは、当時まだ少年でしたがその展示を見ておられ、後に日本近代美術史を揺るがす戦争画についてのエッセイを書かれたからです。

展覧会を開催する時は、菊畑さんに講演会をお願いしたい、と願ってきましたが、その夢は叶いませんでした。それでも、この秋、藤田展と菊畑展の会期が少し重なっていることに感無量です。話好きのお二人のことですから、きっと天国で丁々発止語り合っておられることでしょう。

館長 岩永悦子



6



4



2

1. 藤田嗣治《タビスリーの裸婦》1923年 京都国立近代美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296
2. 藤田嗣治が晩年をすごした、アトリエを兼ねた住居
3. 藤田嗣治《魚河岸》1934年 下関市立美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296
4. 藤田嗣治《仰臥裸婦》1931年 福岡市美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296

CONTENTS

- 00 見てから読むか、読んでから見るか
薬師如来坐像
- 04 ミドコロドコ?
藤田嗣治と彼が愛した布たち
- 06 ミドコロドコ?
菊畑茂久馬:「絵画」の世界
- 08 学芸員と、みてはなし。
《黒染茶碗 銘「次郎坊」》
- 10 夏休みこども美術館2020レポート
- 11 LECTURE / FEATURE
- 12 CALENDAR / TIPS

EXHIBITION INFO

藤田嗣治と彼が愛した布たち

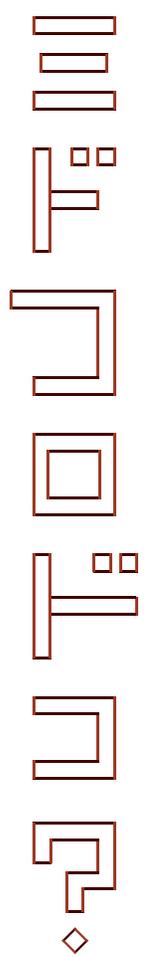
- ◆会期 2020年10月17日(土)～12月13日(日)
- ◆会場 福岡市美術館 2F 特別展示室

藤田嗣治(1886-1968)が工芸品を愛したことは知られていますが、特に染織品は絵のモチーフとして重要な役割を果たしてきました。本展は、メゾン=アトリエ・フジタ所蔵の染織品を藤田が描いた作品とともに展示し、染織を通して藤田の画業を検証する初の試みです。藤田自作の衣装や小物も合わせて展示します。



3

DATA	
作品名	自画像
作者名	藤田嗣治
没年	1886年
生年	1968年
制作年	1929年
技法・素材	水彩、墨/絹本
サイズ	620×430cm



ホーラ美術館蔵 © Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296

人気の画家・藤田嗣治の展覧会を、これまでにない独自の切り口でキュレーションする「藤田嗣治と彼が愛した布たち」展。彼の作品に通奏低音のように流れる「布」に注目した、刺激的な展覧会のミッドコロをピックアップします。

具象の画家であれば絵を描く際に、人物が身に着けている衣服であれ、静物を乗せたテーブルクロスであれ、裸婦が横たわるベッドのシーツや枕であれ、布や衣装を全く描かないですますことはまれでしょう。しかし、布を描くことに、創作上の特別な意味を認められてきた画家は多くはありません。筆者は藤田や近代美術ではなく、更紗や筒描など布をフィールドにしてきました。ある時藤田が描いた布を見て、それがどの布なのか同定できるほどに正確に描かれていることに驚いたのが、この展覧会の発端でした。本展では、「藤田と布」というより、「布から見た藤田」という視点で、藤田の画業に布や衣装への愛着、関心が何をもたらしたのかを探ることを試みるものです。

藤田は、フランスのアンティークの布から、日本の藍染めまで、幅広い布を集め、描きました。幸運なことに、藤田の終の棲家となったメゾン＝アトリエ・フジタ（エソンヌ県、フランス）には、藤田が作品に描いた布や自ら縫製した衣服まで、少なからぬ数の布や衣装が残されています。今回、メゾン＝アトリエ・フジタの全面的なご協力を得て、50点におよぶ布や衣装を出品していただくことができました。それらの多くが日本初公開です。

本展では、作品のいくつかを描かれた布とともに展示します。並べて見れば、藤田がどれほどの技術でそれを描写したかが一目瞭然であり、どこを改変したかもまた一目瞭然です。「布」から見た、藤田嗣治の創造の秘密やその内面を一部なりとも解き明かし、藤田嗣治の新しい側面に少しでも光を当てることができれば幸いです。

文 館長 岩永悦子

1 布を入念に再現

今回の表紙《タビスリーの裸婦》の後ろに描かれているのは、壁紙…ではなく布です。折りたたんだ布を広げてそのまま飾ったように、折ジワが入っているのが見て取れます。藤田は単に画面を彩る柄として布を描くのではなく、そのままの有り様を写していることが分かります。実際に描いた布が判別している場合、図柄の大きさや配置まで精緻に再現していることが知られています。



藤田嗣治《タビスリーの裸婦》1923年 京都国立近代美術館蔵 © Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296

2 シーツに注目

絵の中に
布が見えてくる

藤田といえば裸婦を描いたものが有名ですが、必然的に画面に描かれていることが多い布が「シーツ」。どのくらい陰影を描き込んでいるのか、ハイライトを描いているのか、それとも影になる部分を描いているのか、など作品によって様々で、シーツに注目してみると、藤田の絵がちよっと違って見えてくるかもしれません。

3 フランスへ行くのも一緒

左の《自画像》で、背景に掛かっている布は、この雑然とした部屋の中で大きな存在感を放っています。実はこの道具が描かれた布は布団の表地で、工芸的なものへの愛着が強かった藤田のお気に入りの一枚だったようです。というも、その後、藤田がフランスに構えたアトリエに、同じ布が大切そうに飾られている写真が残されているからです。



公益財団法人平野政吉美術財団蔵 © Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 G2296

4 いま話題のアレも自作!?

「描く」のみならず、自分や妻の着るものを「縫う」ことも手掛けていた藤田。裁縫中の自分の姿を《自画像》として描いているくらいですから、彼にとっていかに大切な要素だったかが分かります。本展では、藤田が縫ったものが展示されており、その中にはなんと自作のマスクも含まれています。

EXHIBITION INFO

藤田嗣治と彼が愛した布たち

- ◆会期 2020年10月17日(土)～12月13日(日)
- ◆会場 福岡市美術館 2F 特別展示室

DATA	
作品名	自画像
作者名	藤田嗣治
没年	1886年
生年	1968年
制作年	1936年
技法・素材	水彩、キャンバス
サイズ	1277×1919cm

さようなら
菊畑茂久馬さん

世界から注目されながらも、一貫して九州・福岡に拠点を置いて創作活動を行ってきた菊畑茂久馬。今年惜しくも亡くなった彼の、画業の奥に流れていたものを垣間見ることが出来る展覧会が行われます。

2F

1

DATA

作品名	作者名	生年	没年	制作年	技法・素材	サイズ
舟歌 一	菊畑茂久馬	1935年	2020年	1993(加筆1997, 2002)	油彩・画布	2600x194.0cm

菊畑茂久馬(1935-2020)

は、1935(昭和10)年長崎市で生まれ、福岡市を拠点に制作した画家です。前衛美術家集団「九州派」の主要メンバーとして頭角を現し、その卓抜した造形センスは東京においても注目され、1962(昭和37)年には東京で初個展を開催。以降、国内外の美術館や画廊の企画展に出品を重ね、1960年代の「反芸術」の動向を代表する美術家の一人と目されました。しかし1960年代後半(昭和40年以降)からは中央の美術界

から身を引き、福岡県筑豊の炭坑画家・山本作兵衛を師と仰いで作品の研究を

進める一方、太平洋戦争記録画にいち早く注目し、論考を発表するなど近



代以降の日本における「美術」の根底を問い直す独自の思考を深め、自らの表現の根源をつかむべく格闘しました。1983年、約20年ぶりの個展として油彩画の連作《天動説》を東京で発表。その後《月光》、《月宮》、《海道》、《海暖流・寒流》、《舟歌》、《天河》を連作形式で次々と発表します。当館と長崎県美術館が共同企画・開催した回顧展「菊畑茂久馬回顧展 戦後／絵画」では、過去の作品に加え、新作《春風》を発表しました。その後も菊畑は活発に制作を続けましたが、惜しくも本年5月21日に逝去しました。

本展は、画家の生前に計画され、大作絵画を特集した展覧会となる予定でしたが、急遽回顧的な内容の展覧会に変更しました。国内外での注目を浴びながらも一貫して福岡に住み続け、絵画とは、画家とは何かを問い続けた菊畑茂久馬の軌跡の一端を本展で感じ取っていただきたいと思います。

文学芸術系長(近現代美術担当) 山口洋三

EXHIBITION INFO

菊畑茂久馬：「絵画」の世界
◆会期 2020年9月1日(火)～10月25日(日)
◆会場 福岡市美術館 近現代美術室B

1 《天動説》とは
なんだったのか？

19年の沈黙を破って発表した一連の絵画のシリーズを、《天動説》と名付けた菊畑。ここには彼の独自のスタンスが明らかにされています。一般に「天動説」とは「地動説」が現れることで、すっかり過去のものになった間違った説のことです。しかし東京や世界の美術界から距離を取り、九州・福岡に根を生やして作品を作り続ける菊畑にとっては、例えそれが古臭くなくてもなお、自分を中心に世界を回すのだという表明だったのでしょう。



DATA

作品名	天動説 五
作者名	菊畑茂久馬
生年	1935年
没年	2020年
制作年	1983年
技法・素材	油彩、蜜蝋、木、布・画布
サイズ	258.6 × 194.0cm

2 自らの記憶と
結びついた海

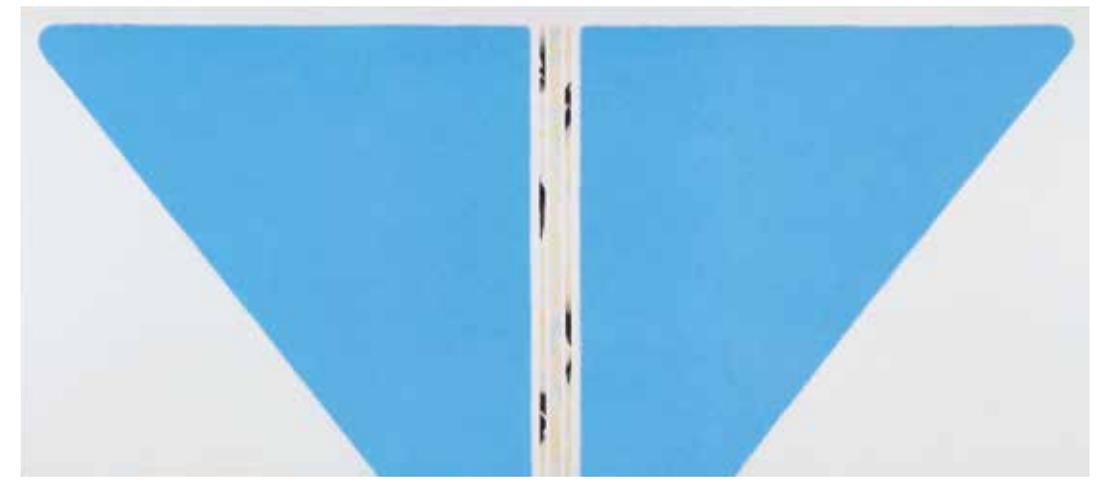
《天動説》のシリーズ以降、菊畑は月(天体)あるいは海をモチーフに連作を描きました。右ページの《舟歌 一》もその一つです。この、絵の具のモノとしての質感を残した大きな作品の前に立つと、まるで深い海の底にいるような静けさを感じます。山本作兵衛の絵画を、自らの記憶から導かれた幻想絵画だと分析していた菊畑。この作品もまた、菊畑が幼少の頃に失った両親の記憶と結びついているのかもしれない。

3 晩年に得た
軽やかさ

2011年に発表された《春風》シリーズは、穏やかで叙情性に満ちた作品です。現代美術家の村上隆氏に「大型新人が現れたかと思った」と言わしめたほど、これまでの重々しい筆致や色彩とはまるで別人のような軽やかさです。75歳を過ぎて新境地に至った菊畑の絵がこれからどのように展開していくかが楽しみでしたが、残念ながら新しい作品を見ることはもうできなくなってしまいました。けれどこの軽やかさの向こうに、菊畑のウィンクが見えるようです。

DATA

作品名	春風 一	制作年	2010年
作者名	菊畑茂久馬	技法・素材	油彩・画布
生年	1935年	サイズ	259.0 × 582.3cm
没年	2020年		



学芸員と、 みて はなし。

自分と異なるリアリティを持つ人が、どのように美術品を鑑賞しているか、想像したことはありますか？今回は視覚障がいがある人と一緒に、当館所蔵作品のレプリカを触って話します。



黒楽茶碗
銘「次郎坊」
（レプリカ）

見て話した人

学芸員 × 視覚障がいがある人



黒楽茶碗
銘「次郎坊」
（本物）

作品名	黒楽茶碗 銘「次郎坊」
作者名	長次郎（生没年不詳）
時代世紀	桃山時代 16世紀
技法・素材	陶器
サイズ	高 8.4 口径 10.4 胴径 11.2 高台径 5.0cm 重さ 272g
コレクション	松永コレクション

視覚障がいがある人
濱田庄司さん

15年ほど前のイベント参加をきっかけに、様々な機会美術鑑賞をしてきた。



には独特の匂いがあります。なんとといえばいいか、苦くて重い「歴史の匂い」です。

濱田 今日ではマスクをしているから、残念ながら嗅ぐこともできませんね（笑）。私にとっては、見えないだけに、匂いを嗅ぐことと音を聞くことはどうしてもしたくなりますね。作品はそれぞれいろんな匂いがするんですよ。

鬼本 今日はもう一つおもしろい仕掛けを準備しています。もう2つ、黒楽茶碗と同じ重さの器がありますので、ぜひこちらも触ってみてください。

濱田 これはまた全然違いますね。缶でしょうか。



後藤 空っぽの缶の中に重しを入れて同じ重さにしてあります。

濱田 まるで同じ重さとは思えない！缶の方がずいぶん重く感じます。比べてみると、いかに黒楽茶碗の重心やバランスがよいか分かりますね。触り方まで変わってしまう。こちらは全然おもしろくないもん！（もう一つの器を手取る）これは紅茶用のカップかな？

なぜそう思うのかというと、取っ手がついているから。やはり片手で指を通して持つのかな？と、鑑賞する時に用途が先立ちますね。両手で包みこむようにはなりません。それに比べて、先程の黒楽茶碗は、触っただけでは僕には用途が分からないです。

鬼本 触った時になにかから考えるか？というのもおもしろいですね。ちなみに、いま仏像のレプリカを作っています。仏像は情報量が多く、なかなか耳からだけでは伝わりにくいので、触っていただけるようになるのが楽しみです。

濱田 仏像は確かに分かりませんが、聞いて鑑賞も楽しいのですが、やはり触ったものは強く記憶に定着します。

鬼本 古美術作品はそうですが、私たちの生活の中にあるうちは触ることができるのに収蔵されると途端に触れなくなるのも美術館の難しいところですね。

濱田 海外では、本当は触ってはいけなけれど、見えない人だけはいいよと触らせてくれる美術館もあると聞きました。それで警報が鳴っちゃったなんてこともあるそうだけど（笑）。ある意味での寛容さがあるのかもしれないし、モノはいつかなくなると考えられているのかもしれない。僕だって国宝に触らせてくれとは言いませんから、触れることができる作品が増えると感じちゃいます。

濱田 僕は学生の頃から目が見えないのですが、社会人になってから美術館などにも興味を持ち始めて、イベントをきっかけに美術の鑑賞を始めました。ガイドさんからどのような作品かを聞いたり、作品に触らせてもらったり、いくつか方法があります。絵を見ることそのものも楽しいですし、いろんな人と関わることができるのもおもしろいです。

鬼本 誰と鑑賞するかによっても全く違う体験になりますよね。実は見えていても初めて見るものを説明するのはとても難しく、以前ある現代美術展で作品の説明に困っている介助者の方に出会ったことがあります。それを見てつい話しかけたんですが、3人だと話がふくらんですごく楽しかったですね（笑）。

後藤 今日鑑賞していただくのは、ある茶碗のレプリカです。侘び茶を大成させた千利休が、その美意識を反映させるために長次郎という陶工に作らせたと言われる黒楽茶碗を、3Dプリンターで再現しています。

鬼本 まずは触っていただいて、感想を聞きたいですね。

濱田 わー、すごいこれ。こんなものが3Dプリンターで作れるのですか？（指先でちょっと弾く）しっかり陶器っぽいな音がしますよ。完璧な形ではないですね。つるつるはしてなくて、ちょっと歪な形で

す。これは触ったらみなさん感激するはずですよ。素材はなんですか？

後藤 樹脂で再現しています。それだけだと実物より軽くなってしまうので、職人さんに頼んで、中に金属を入れて重心と重さも本物とピッタリ合わせました。見た目だけではなく、表面も漆を塗るなどして触り心地もそっくりに仕上げている、とても完成度の高いレプリカです。



濱田 まずこの手の密着感がすごいですね。指にうまくくっついちゃう。しっかりきて落ち着きます。

後藤 長次郎は楽焼の初代で、楽家は16代の今に至るまで、ろくろを使わず手捏ねで茶碗を作っています。茶の湯において「お茶を飲むための器」を初めて形にした人でもあります。

濱田 口の部分のなんともしれん手で作った感じがいいです。完全なまんまるではなくて、思わず唇をつけたくなりますね。

学芸員
後藤恒（古美術担当）
専門は仏教美術。

学芸員
鬼本佳代子（教育普及担当）
専門は美術館教育。

LECTURE

つきなみ講座

October-December 2020

毎月1回、当館館員が、自身の仕事、展示、研究、関心ごとに
ついて語ります。聴講無料。直接会場にお入りください。

※ご参加の際は、必ずマスク着用をお願いします。
※受付時に氏名、連絡先をお尋ねします。

美術とフェミニズム3 衣服、女性、まなざしをキーワードに

- ◆日時 11/14(土) 15:00-16:00
- ◆会場 レクチャールーム(定員25名)
- ◆講師 正路佐知子(学芸員 近現代美術担当)

11月

10月

夏休み子ども美術館 「みるみるこわい絵の世界」をふりかえる

- ◆日時 10/24(土) 15:00-16:00
 - ◆会場 レクチャールーム(定員25名)
 - ◆講師 上野真歩(教育普及専門員)
- 「みるみるこわい絵の世界」展示の様子



仙厓さんのすべて(1)

- ◆日時 12/19(土) 15:00-16:00
- ◆会場 レクチャールーム(定員25名)
- ◆講師 中山喜一朗(総館長)

仙厓義梵《犬図》江戸時代19世紀



12月



「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート

「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート

「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート

「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート



「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート

「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート

「こわい? それともおもしろい?」
夏休み子ども美術館レポート

FEATURE

ファミリー DAY 2020

10/31(土)・11/1(日)・11/3(火祭)

毎年、当館の開館記念日である11月3日とその前後の3日間に、「ファミリー DAY」を開催しています。この3日間は、親子で美術館を楽しめる活動をたくさん準備しています。今年は、ソーシャルディスタンスを意識しながら、家族ごとに楽しめる内容も企画する予定です。

子どもを連れて美術館に行きにくいと感じている方や、美術館に行ったことがない方も、ぜひファミリー DAY に遊びにきてください。



ファミリー DAY2019の「初めてのベビーカートツアー」の様子

※新型コロナウイルスの感染状況によっては、イベントの内容が変更や中止になる可能性がございます。最新の情報は当館のホームページでご確認ください。

福岡市美術館ミュージアムイベント協賛企業・団体 /



CALENDAR

TIPS



OCTOBER

NOVEMBER

DECEMBER

特別展示室	コレクション展示室 近現代美術			コレクション展示室 古美術		東光院仏教美術館
	近現代美術室 A	近現代美術室 B	近現代美術室 C	企画展示室	松永記念館室	
10/17・12/13 藤田嗣治と彼が愛した布たち	10/27・12/27 藤田嗣治と関わった画家たち	10/27・12/27 藤田嗣治と関わった画家たち	10/27・12/27 藤田嗣治と関わった画家たち	11/17・2021/1/31 インド更紗からアフリカン・プリントへ	11/17・2021/1/31 風を視る	11/17・2021/1/31 茶道具としての仏教美術
10/17・12/13 藤田嗣治と彼が愛した布たち	10/27・12/27 藤田嗣治と関わった画家たち	10/27・12/27 藤田嗣治と関わった画家たち	10/27・12/27 藤田嗣治と関わった画家たち	11/17・2021/1/31 インド更紗からアフリカン・プリントへ	11/17・2021/1/31 風を視る	11/17・2021/1/31 茶道具としての仏教美術

本誌掲載の催しは当館主催のものです。他の催しやイベントの詳細は、当館ウェブサイト随時お知らせします。また、催しの名称、会期などは変更となる場合がございます。

おまけ美術館

福岡市美術館をもっと楽しむための、
うれしい小さな情報を取り上げます。

「藤田嗣治と彼が愛した布たち」特別展コラボレーションメニュー

◆提供期間 10月17(土)～12月13日(日)
1名さま3,000円(税別)



2階レストラン「プルヌス」では、特別展「藤田嗣治と彼が愛した布たち」の開催にあわせてスペシャルコースをご用意しています。パリで数々の名作を生み出した藤

田の代表的な表現「乳白色の下地」を模したカプのポタージュやパリでの生活において藤田も通ったとされるレストランの名物料理「パイペース」をプルヌス風にアレンジした一品などフランスの味を展覧会とともに楽しみください。

ヒグチユウコ展 CIRCUS

◆会期 2020年12月24日(木)～2021年2月7日(日)
◆会場 福岡市美術館 2F 特別展示室

空想と現実を行き交う自由な発想とタッチで、作品制作のみならず絵本の刊行など幅広く活躍する画家ヒグチユウコ。初の大規模個展となる本展では、約20年の画業の中で描かれた500点を超える作品を公開します。猫や少女、キノコ、不思議な生きものたちが繰り広げる、楽しくもどこか切ないサーカス(CIRCUS)の世界をお楽しみください。



ヒグチユウコ「Circus」2018年 ©Yuko Higuchi

ふくおか応援寄付

福岡市美術館が魅力的であり続けるためには、今後とも機会あるごとに美術品を収集することが不可欠であり、そのための資金として皆さまから「ふくおか応援寄付」(ふるさと納税による寄付)を募集しています。

わたくしclub

wa+ club
会員になると、展覧会や映画などの料金がオトクに!もっと身近にアートのワクワクを感じませんか。福岡市文化芸術振興財団のホームページ(<http://www.ffac.or.jp/wa/>)またはミュージアムショップ店頭で入会受付中。

開館時間 9:30～17:30
(7月～10月の金・土曜日は9:30～20:00)
※入館は閉館の30分前まで。
休館日 月曜日/年末年始(12/28～1/4)
※月曜日が祝日・振替休日の場合はその後の最初の平日
〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051(代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

